

授業協議会記録

1 研究の視点

- 音読を中心とした学習活動は、生徒に詩の魅力に気付かせたり、詩の内容を深く解釈させたりすることに役立つ活動であったか。
- AIの自動読み上げ機能を使ったICTの活用は学習の効果を上げる上で効果的であったか。

2 自評

- 本単元の題材『月夜の浜辺』は、これまでは3年生で扱っていた教材であるため、2年生では内容の読取が難しいと想定していたが、今回は音読を通して内容の理解につなげた。
- この時期の生徒にとって音読には抵抗感があり、授業アンケートでも生徒は音読に慣れていない実態が分かった。授業者自身も音読活動を中心とした授業をしていなかったという反省の思いもあって、本単元を設定した。
- 機械の音声に慣れた生徒にAIによる音声を聞かせることで、人が声を出して読むことの良さに気付かせることをねらった。それによって、「人が読む」「機械が読む」場面を使い分けることの大切さに気付かせたいと考えた。
- ロイロノートの録音やその蓄積ができるのがよい。周りの雑音があっても、イヤホンマイクである程度収音が可能である。

3 質疑応答

- 授業者と生徒の解釈の差があると感じた。この詩の読み方は生徒に任せるのか、指導するのか。
→詩の解釈を授業者から解説することはない。自分なりの解釈を三角ロジックを使って根拠を明らかにしながら説明できるかを求めている。生徒の主張の中で、矛盾や根拠が不確かなところがあれば問い返して再考させたり、生徒からの反論を促したりする。3年生にもなれば、生徒同士で主張が論理的かどうかを指摘し合えることを目指している。
- 本時のAIの音声は、どのような意図で用意したか。
→イントネーション、アクセント、音の伸ばし方、感情なども細かく調整できるソフトを使った。よっぽどおかしい発音については調整した。感情も数値をゼロにした。作者が男性なので、男声で作成した。最後の「捨てられようか(↓)」は疑問文を思わせる「捨てられようか(↑)」と調整して、違和感を持たせるように工夫した。詩の解釈も関連させて、疑問ではなく「捨てられようか、いや捨てられない」という反語表現について押さえる機会を作った。
- 反語表現について、生徒の発言から出なかったらどうしたか。
→出なかったとしても、どうにか引き出すつもりだった。生徒から出てきてこそ学びにつながると思う。生徒の自然な思考の流れの中で押さえられるといいと思うので、授業中に展開を修正しながら進めている。
- 生徒が授業中に板書をとる姿が見られなかったが、どうしてか。
→板書をそのままノートに書かないよう指導している。ポイントを押さえて、必要なことを自分の言葉でメモするよう指示している。
- 解釈の違いが音読に表れているのか知りたい。
→生徒の動画を視聴して確認してみましょう。

4 指導助言（愛媛大学教育学部 講師 清田 朗裕 先生）

- ICTを国語科にどう使うかを研究している。今回は、生徒がICTの活用によって音読を振り返ることができる授業であった。記述されていることを音読するのが目的ではなく、「音読によってどんなことが学べるか」についての授業であり、生徒もそれに十分応えていた。
- 教師の解釈を押し付けるのではなく、生徒の力を育てるには生徒自身が解釈できるようにすることが大事である。今回は、ICTを使って自分の音読を振り返りながら、自分なりの目標を立て、自分で捉えなおして、自分でできたかどうかを確認する流れができていた。
- 音声言語は一度きりだからこそ価値があったが、ICTを活用することで今まではできなかったような音読の授業ができるようになった。